

Ⅱ 植物区系とフロラ

1. 山形県の植物区系とフロラ

日本列島の植物区系は、地史的背景や環境条件の違いによりいくつかの小区分されている。その線引きは学者によって多少の違いはあるが、山形県は前川文夫のいう日本海地域に属している。

気候的には冷温帯に属し、ブナ林によって代表される夏緑広葉樹林が発達しており、フロラ的にも温帯フロラが主体をなしている。特に、多雪地に適応して、比較的新しく分化したと考えられる多くの日本海要素植物（裏日本要素植物）が分布しているのが特徴である。その主なものは、ミヤマカワラハンノキ、タムシバ、オクチョウジザクラ、マルバマンサク、ホナガクマヤナギ、イワナンシ、オオバツツジ、オオコメツツジ、ムラサキヤシオ、ウゴツクバネウツギ、タニウツギ、ケナシヤブデマリなど（以上夏緑広葉樹）、また常緑広葉樹で伏条性の小低木として多量の積雪下に圧伏して寒冷から守られて生育するヒメモチ、ユキツバキ、エゾユズリハ、ヒメアオキ、ハイイヌツゲ、ツルシキミ、チャボガヤ、ハイイヌガヤなど。草本植物としてはコシノカンアオイ、オオサワハコベ、キクザキイチリンソウ、キバナイカリソウ、コシジシモツケソウ、オオバキスミレ、ナガハシスミレ、デワノタツナミソウ、オオカニコウモリ、イヌドウナ、ヒメサユリ、コシノコバイモ、トガクシシヨウマ、シラネアオイなどをあげることができる。

以上の日本海要素は種の分化の程度や分布様式が一樣ではないが、前川（1977）は次の4型に区分している。

（1）トガクシシヨウマ型 (*Ranzania* type)

日本の代表的な遺存的固有属または準固有属。トガクシシヨウマ、サンカヨウ、シラネアオイ、オオバツツジなど。

（2）スミレサイシン型 (*Viola vaginata* type)

表日本に対応種をもち（1）に比べてはるかに新しい時代に分化した群。トキワイカリソウ、スミレサイシン、サイゴクミツバツツジなど。

（3）ハイイヌツゲ型 (*Ilex crenata* var. *paludosa* type)

比較的新しい地質時代に多雪環境の中で分化した群。主に、深雪による物理的条件で枝が圧伏されて地に伏し、しばしば不定根を生じて株がふえる程度の軽微な変種段階の分化をきたしたものである。

キャラボク、チャボガヤ、ハイイヌツゲ、エゾユズリハ、ヒメモチ、ツルシキミなど。

（4）チョウジギク型 (*Mallotopus* type)

本州中部以北では日本海側にも分布し、西日本では日本海側にも、太平洋側にも分布する群。アスナロ、ナラガシワ、タムシバ、クロヅル、アクシバ、チョウジギク、クルマバハグマなど。

日本海要素植物の分布域の拡がりにもかなりの差異があり、必ずしも明確に区分できるものではなく、いろいろな線引きが試みられている。東北地方では奥羽山脈東側斜面低地帯を境にする、ほぼ南北の帯が妥当と考えられている（藤原 1983）。

2. 高島町の植物区系とフロラ

山形県の内陸に位置し、福島県と境を接する高島町は、植物区系上、前述のように前川のいう日本海地域に含まれ、フロラ的には温帯フロラ、特に日本海要素植物によって特徴づけられる。高島町の植生調査資料から主な日本海要素をとりだしてみると次のようになる。

（1）夏緑（落葉）広葉樹

タムシバ、オクチョウジザクラ、マルバマンサク、ホナガクマヤナギ、ムラサキヤシオ、ウゴツクバネウツギ、タニウツギ、オオバクロモジ、アキシバなど。

（2）常緑広葉樹

ヒメモチ、ユキツバキ、エゾユズリハ、ヒメアオキ、ハイイヌツゲ、ツルシキミ、チャボガヤ、ハイイヌガヤなど。

（3）草本植物

オオサワハコベ、キバナイカリソウ、トキワイカリソウ、ヒメサユリ、ナガハシスミレ、オオタチツボスミレ、ミヤマアブラススキ、オクモミジハグマ、スミレサイシン、サンカヨウなど。